

『羅生門』を読んで
 三年〇組 〇〇〇
 『羅生門』を読んで人間の自己中心の心を
 見たような気がしました。人は生きるか死ぬ
 かという状況におかれたとき、自分ではどち
 らにするか決められないのだとも感じました。
 天災や火事で荒れ果てた京都の町。狐狸や
 盗人、死人しかいなくてカラスの飛びかう羅
 生門にやってきた、リストラされ途方にくれ
 ている下人。うえ死にするか生きていくため
 に盗人になるかという二者選択ができないま
 ま悩んでいるとき、羅生門でみたのは死体。
 しかも人形のような死体と異臭。私にはとて
 も想像できないけど、とにかく恐ろしい光景
 だということはわかりました。
 ある強い感情が嗅覚を奪ってしまったと書
 いてあるけど、きっとそれは恐怖感が感覚を
 マヒさせてしまったのだと思います。そん
 な時出会ったのが猿のような老婆です。背が
 低くやせていて白髪頭の老婆が死体をのぞき

読んだ本

『羅生門』芥川龍之介

こんでいたのです。しかも死体の長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめると、老婆の姿を見てしまったのです。下人の恐怖心はその姿を見たとき、激しい憎悪の気持ちが出てきたのは、下人の正義感だと思います。人間は正義感とか善悪を区別する判断能力を持っていないはずで、下人は生きること、一杯で心の奥のどこかにかくれていた正義感が老婆に対する憎悪になったんだと思います。極端かもしれないけど、うえ死にすることが善で盗人が悪と考えるなら、この時の下人はきっとうえ死にすることを選んだはずで生きていくためには盗人になるしかないなんてんだか悲しすぎます。

さらに、人がいるんな心を持っているんだと不思議に思ったのは、下人が老婆を刀でおどした後、老婆に対する憎悪が消えてしまったという事です。これは、下人が老婆の悪を正したいという自己満足なんでしょうか。

また下人の心は変わります。老婆が抜いた

髪の毛でかつらをつくるという答えに、また
 憎悪を感じるというのは、もっといいい答えを
 望んでいて、裏切られたように思ったのだと
 思います。
 そしてとうとう下人は盗人になることを選
 びました。それは老婆の、うえ死にしないた
 めに悪いことをいっぱいしてきたのだから死
 人が髪を抜きとられるのは当然だ、自分もう
 え死にしないために髪の毛を抜いているのだ
 という自分に都合のよい言い訳を聞いてしま
 ったからだと思えます。自分の悪を人のせい
 にしてしまつた老婆は下人に着物をはぎとら
 れてしまふから少しかわいそうだけど、自業
 自得だと思えます。老婆の着物をはぎとつて、
 とうとう盗人となつた下人。「老婆と同じ目
 にあつちやうよ。」と私は言つてあげたいです。
 人の心は、人とのかかわり方や状況で何と
 でも変わるものだと思えます。やっぱり自己
 中心がいけない訳じゃないけど、善悪の判断
 の難しさをこの本を読んで知りました。